

女性医師支援センター便り

～日本医師会第13回男女共同参画フォーラム～

テーマ「今後10年の医療界で男女共同参画は何をめざすか」

宮城県女性医師支援センター長

宮城県医師会常任理事

高橋 克子

7月22日(土)、名古屋に着いた途端、激しい蝉しぐれに圧倒された。日本医師会の横倉義武会長が「これからの医療界の10年間はどうか。女性活躍推進法が制定され、文字どおり女性活躍推進のため日本医師会は真剣に取り組みたい。働き方改革は重要な課題であるが、応召義務や夜間救急のある医師の働き方には、慎重な議論が必要である」とご挨拶され、柵木充明愛知県医師会長の「医師は労働者だという議論が先行し、過重労働に焦点が当たる傾向がみられる。医師の働き方改革は、喫緊の課題である。医師の質の向上は医療の質の向上である」とご挨拶された。

基調講演は、「医師の働き方を考える」と題し、産業医科大学公衆衛生学 松田晋哉教授が講演した。平成29年3月「働き方改革実行計画」で時間外労働上限を月45時間、労使が合意した場合は60時間(繁忙期100時間未満)、この上限を超えた場合は罰則付きとなる。医師は2年間猶予の対象となっているが、診療以外の業務の多さ、応召義務、業務範囲の問題など複雑に関係している。「医師は専門職」で「労働者」として一律に規制されることには、感情的な違和感を持つ医師もいる。しかしながらワークライフバランス、医療安全を考慮するといずれは法の規制が必要になると思う。フランスではすでに2010年に医師の労働時間に関する法律が施行されている。各年の専門医養成数は各地方の必要数に応じて決められ、一般医の養成が40%で、学生時の試験の成績などで偏在を無くすように、計画されている。女性医師の子育て支援は充実し、保育所、保育ママ制度で安心して働けるし、パートタイム労働・ワークシェアリングの促進、グループプラクティス、ワークシフトの働き方も多い。これからの働き方の基本的視点は、①モチベーションの維持、②超高齢化への対応、③ワークライフバランスへの配慮である。そしてそのために必要なことは①ネットワーク型のサービス提供、②フランスのような柔軟な働く時間の基準づくり、③子育て支援の充実、④医師の長時間労働を助長するような社会環境の改善、を挙げて講演を結んだ。

続いて日本医師会男女共同参画委員会委員長の小笠原真澄先生により同会が実施した具体的な取り組み、会長諮問「医師会組織強化と女性医師」に対する答申作成の途中経過の報告があり、日本医師会常任理事の今村定臣先生により女性医師支援センターの事業報告があった。

イクボス大賞とイクボス特別賞の授賞式が行われ、シンポジウムに移った。

「これからの医療制度変革とそれに伴う医師の働き方の変化は」がテーマであった。

(1)「新専門医制度の導入による働き方の変化」では、前野哲博筑波大学総合診療科教授が、アウトカム基盤型教育を紹介し、アウトカムを認識することでこれからの多様なキャリアにも対応できるのではないかという見方を示した。

(2) 「患者の立場から見た医師需給問題」では、山口育子認定NPO法人ささえあい医療人権センター COML理事長が患者の立場から講演した。医療従事者の需給に関する検討会で30～50代の男性医師を「1」とした場合、女性医師と60歳以上は「0.8」とみなされたことに疑問を呈した。地域偏在問題に関する議論も進んでいないし、一般市民に医療現場を理解してもらうことも重要な課題であると力説した。患者の立場からのシンポジストは、今までなかったので新鮮な感じを受けた。

(3) 愛知県医師会イクボス大賞受賞者、社会医療法人宏潤会大同病院 吉川公章理事長は、「これからの日本医療制度とそれに伴う医師の働き方の変化」と題し、充実した保育所や短時間正規雇用制度医の不公平感なしにする工夫により、女性職員の妊娠率上昇、男性職員の育児参加の推進が図られ、医師数も増え病院収益も上昇した。

(4) 愛知県医師会イクボス特別賞受賞者、公立陶生病院小児科 加藤英子部長は、「女性医師のキャリアデザイン～『子育て支援制度』が医局を活性化する～」と題して、名古屋大学小児科と関連病院は、平成20年から子育て中の女性医師を短時間勤務で雇用する『子育て支援制度』を始めた。制度運用のポイントは①制度終了後に関連施設で当直・当番ありの常勤に復帰する意志があること（選択的支援）、②制度利用者は医局長が行う全体の人事の数には含めないこと（労働力減ではなくプラス枠）、③制度運用は女性医師ワーキンググループ教官と副医局長が行っていること（男性医師の参加）の3点である。上司の意識改革も必要だが、女性医師側も必要とされる能力を身に着けることも重要であると結んだ。こども3人を育て、たくさん作ったお弁当の写真を見せて大きな拍手が沸いた。

第13回男女共同参画フォーラム宣言を読み上げ満場一致で採択された。次期担当県の高知県医師会長のご挨拶で閉会となった。329名の参加であった。

第1回目から欠かさず出席しているが、年々テーマが洗練され、女性医師のみならず医師全体の働き方に視点が移っているような気がする。研鑽なのか、単なる長時間労働、過重労働なのか、その解決には大きな課題が残っている。女性医師の働き方に、医師偏在の問題も絡んでいてさらに新専門医制度が直面して今後の方向を複雑にしているのではなかろうか。今後の医師の働き方を考え、議論を深めるための充実したフォーラムであったと思いながら帰途についた。

NO PHOTO